

ケアセンターけやき 訪問看護ステーション

井関 かおる（看護師）

功 績	脳梗塞後に失語・高次脳機能障害の後遺症があり、常時身の周りの支援を必要と していたが同居の母親に対して傷害未遂事件を起こし、突然独居状態になり窮地 に追い込まれた利用者さんに対して看護師の使命を全うした功績
推 薦 者	井本哲吉（居宅 ケアマネジャー リーダー）
推 薦 理 由	いかなる事情や背景があっても、第一義に看護師の使命である「利用者の生命、 尊厳の保持」を実践。誰も寄せ付けない雰囲気の中で、訪問援助を実施。そのこ とが、再び家族との交流を再開できたきっかけを作ったことから推薦します。

内 容

ケアセンターけやき訪問看護ステーション訪問看護師 井関さんは本ご利用者に対し令和7年9月より血压及び服薬管理の目的で訪問開始した。

ご利用者は、平成30年頃脳梗塞を発症。失語症、高次脳機能障害、右半身不全麻痺などの後遺症が残る。その時は回復期リハビリを経て退院したが、以降は通院や服薬調整を行わず、自分のペースで過ごされていた。主介護者は同居の母親であり、血压測定の手伝いの他、食事の配下膳、掃除、洗濯、金銭工面などの世話をしていた。

元々マイペースな気質だったが、脳梗塞発症を境に性格が一変。

理解不能な物事に遭遇すると威嚇したり、もう死ぬなどと包丁を自分の胸に突き立てるなどして、母親を精神的に追い詰める行為を度々とっていた。

そして、同年2月初旬、その行為がエスカレートし、ついに警察騒動にまで発展。母親は「緊急避難」の形で別に暮らす娘宅に身を寄せ、以後ご本人は独居状態になる。

井関看護師は受診の度に生活や服薬、血压の状況を医師に報告していたが、ご家族の協力が得られなくなった為、正確な状況を医師に報告できずその状態に見合う薬の処方が困難な事態に陥っていた。

「母親に対して暴力とみられる行為をした後でしかも警察の観察下に置かれていてご家族すら事件後は自宅に立ち入っていない状況であり、精神的にさらに不安定になっているご利用者への訪問は危険なのではないか？」

とケアマネも一旦は支援中止の判断を提案したが、井関看護師は、「支援開始から半年ほどが経過し、トラブルの直前までは私の訪問日程をきちんと覚えていて、血压測定の結果や残薬の数も自ら示してくれるまでになった。大切なのは、私たちの使命である「生命と尊厳の尊重」です。」と、訪問継続を決断。

母親とトラブルのあった翌週に訪問すると、自転車を止める音を聞いたとたんにご利用者が井関さんを出迎えてくれたとの事。そのことがきっかけでご家族も自宅に入れるようになり、「井関さんの行動がきっかけで自宅に入れる状況に戻った。安否確認も滞ることなく続けて下さっているので大変感謝しています。」と感謝のお言葉をいただく。

この一連の行為は、ご利用者とそのご家族に対し著しい貢献をされたと思います。